

東京新聞社説にみられる文体シフト

砂川有里子（筑波大学名誉教授）
マダドナーめぐみ（ウィーン大学）

【要約】

本稿では、東京新聞の社説を用いた文体調査を行い、デスマス体を基調とする論説文での主張表明にダ体が用いられる現象を取りあげ、デスマス体からダ体への文体シフトが果たす機能について考察する。その上で、論説文におけるデスマス体からダ体への文体シフトに、主張の連鎖内部の後景的な情報を明示するという構造的な要因と、重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機という要因があることを主張する。

1. はじめに

日本語教育において、文章を書くときはデスマス体かダ体のどちらかに統一するよう指導することが多い。しかし、現実にはデスマス体からダ体へ、あるいはダ体からデスマス体へと同一文章中にもかかわらず文体が切り替えられることが少なくない。そのため、中上級レベルの作文指導ではこの種の文体シフトに関する指導を行ったほうがよいという主張が行われている

（Maynard1992、熊谷 2001、石黒 2006 など）。その一方で、文体シフトに習熟しなくても不都合は生じないし、論文では文体を統一するのが基本だから、文芸創作を志すなど特殊な場合以外では文体シフトの指導は必要ないという主張もある（中村 2011）。

そのことの是非はともかくとして、まずはどんな文章にどのような要因で文体シフトが生じるのかを究明する必要がある。しかし、これまでに多くの考察が試みられているものの、文章ジャンルによってそれぞれに特有の要因が想定されるため、その解明は容易ではない。そこで本稿では論説調の文章に的を絞ってこの問題の解明を試みることにする。具体的には、デスマス体を基調とする東京新聞の社説¹においてダ体の文が生じる場合の量的な調査を行い、その結果に基づき先行研究で指摘されていることの妥当性を検討し、文体シフトの要因を整理する。次いで平叙文や疑問文に見られる「主張」の文に着目し、デスマス体とダ体の使い分けについての質的な考察を行う。

2. 先行研究

メイナード（1991）は、小説に見られる次のような会話において、主節的発話に従属する従属的発話を行う場合にダ体が用いられると述べている。

¹ 東京新聞社説に注目したきっかけは、2015年8月にボルドーで開催された第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムにおいて砂川が講演した際、牧野成一先生から東京新聞の社説に文体の混用が多く見られるとのご指摘を頂戴したことにある。本稿のきっかけを作ってくださった牧野先生に記して感謝いたします。また、第29回日本語教育連絡会議で多くの貴重なコメントをくださったみなさまと本稿の調査に協力してくださったウィーン大学の久保美和子氏に感謝いたします。

- (1) a これといって原因になるような出来事があったわけではないと思いますね。
- b もし表だった喧嘩でもしていれば、きっと晴江の口から近所にひろまっているはずですから。
- c 多分、晴江にしてみれば、自分と同年配の女が一人で洒落た家に住んで、垢抜けた身なりで通勤している。
- d 時たま外車で送られて帰ってくる。
- e そういう派手な暮らしが妬ましかったということじゃないんでしょうか。

(メイナード 1991 : 77)

(1)は同一人物の発話である。デスマス体に混じってcとdでダ体が使われているが、これはeの「そういう」が指す要素を列挙するものであり、eに従属する従属節のような役目を果たしている。メイナードはさらにデスマス体を基調とする随筆の例を取りあげ、デスマス体が作者の意見の表現、ダ体が作者の意見を支える従属的情報の表現に用いられていることを指摘した上で、デスマス体は情報を前景化 (foregrounding) して伝えるのに対し、ダ体は情報を後景化 (backgrounding) して伝えるのに用いられると結論づけている。

さらに、Maynard (1992)は、前記の考察に加えて書き手の心理的な動機を取りあげ、書き手が読み手を別の主体として強く意識すればするほどデスマス体が用いられるようになるのに対し、その意識が低い場合はダ体が用いられると述べている。

メイナードが談話の構成や組織化、あるいは書き手の心理的動機や表現効果という観点から文体シフトを捉えようとしているのに対し、野田 (1998) は文の機能という観点から分析している。野田は、文章・談話を構成する文を以下の5種類に分け、文体シフトが起こりやすい要因を探っている。

- 1) 事実文：単に事実だけを客観的に述べる文
- 2) 心情文：聞き手に伝達する意識がないまま、自分が思ったことを述べる文
- 3) 従属文：従属節とおなじように、他の文に従属している文
- 4) 主張文：事態に対する判断や説明を、話し手が聞き手に主張する文
- 5) 伝達文：聞き手に対する質問や命令を、話し手が聞き手に伝達する文

野田によれば、デスマス体が基調の文章・談話にダ体が混じるのは心情文と従属文、ダ体が基調の文章・談話にデスマス体が混じるのは伝達文と主張文が使われたときである。また、従属文がダ体になるのは、文への従属度が高いため、心情文がダ体になるのは聞き手への働きかけが弱いから、伝達文と主張文がデスマス体になるのは聞き手への働きかけが強いためであると説明される。

一方、熊谷 (2001) は、新聞の投書を分析し、文の種類と文体シフトとを一義的に関係づける野田の主張は一般化できるものではないと批判する。熊谷は、シフトが起こる文の出現位置および書き手の性と文体シフトとの関連について量的な調査を行い、書き手の心理の変化が文体シフトに影響を与えることを示唆している。

以上、書き言葉における文体シフトに関して、主要な先行研究を概観した。これらを大きく分けると、文章・談話の構造、書き手の心理的動機、文の機能という3つの観点からの分析である

とすることができる。このうちの、文章・談話の構造と書き手の心理的動機という問題については、メイナード（1991）や Maynard (1992)が質的、熊谷（2001）が量的な考察を行っているが、扱っているデータが十分ではなく、一般化できるまでに至っていない。また、文の機能という点については野田（1998）が詳しく考察しているが、熊谷（2001）が批判しているように、文の機能と文体シフトとの関係は簡単に一般化できるものではなく、さまざまな要因が複雑に絡み合っていることが予想される。

そこで本稿では、新聞の社説という比較的フォーマルな論説調の書き言葉に見られる文体シフトの状況について、まずは文の機能の観点から量的な調査を行い、上記の先行文献のうち、主として野田（1998）の議論の妥当性を検討しつつ文体シフトに関わる文の機能的な要因について考察する（4節）。次いで、「主張」という機能に的を絞って質的な考察を行い、Maynard (1992)や熊谷（2001）の議論の妥当性を検討し、文章・談話の構造と書き手の心理的動機や表現効果について考察する（5節）。

3. 東京新聞社説の調査

3. 1 調査対象

調査は、2015年11月8日～2016年5月22日までに東京新聞に掲載された社説「週のはじめに考える」と「年のはじめに考える」のうち、文体シフトが見られる23の記事（デジタル版）を対象とする。これらの記事の文の数と文末の文体形式による分類は表1の通りである²。

表1 文の数と文体による分類

No.	ID No.	文の数	デスマス体	ダ体	その他
1	151108	46	28	8	10
2	151116	43	27	14	2
3	151206	48	31	11	6
4	151220	43	16	14	13
5	151231	50	31	8	11
6	160101	54	36	11	7
7	160103	55	37	14	4
8	160105	36	32	4	0
9	160106	51	27	17	7
10	160110	51	35	10	6
11	160111	51	25	9	17
12	160124	48	33	15	0
13	160201	56	36	7	13
14	160207	45	41	4	0
15	160221	48	30	10	8
16	160229	41	27	11	3
17	160313	43	35	5	3
18	160403	46	31	8	7
19	160418	42	32	7	3
20	160424	53	23	12	18
21	160505	53	23	20	10
22	160515	37	31	4	2
23	160522	51	23	18	10
合計		1091	690	241	160
比率		100%	63%	22%	15%

² ID 番号は刊行日に基づいている。また、文の数には記事全体や節ごとの見出しは含まれていない。

表1のデスマス体とは、いわゆる丁寧体、ダ体とはいわゆる普通体の文、その他とは中途終了文や体言止めの文である。この表が示すように、デスマス体が全体の63%を占めていること、および、すべての記事でデスマス体が最多数を占めていることから、東京新聞の社説はデスマス体を基調とする文章であることが分かる。以下ではこのうちのデスマス体690文とダ体241文を合わせた931文を分析の対象とする。

3. 2 文の分類

本調査では、文を平叙文と疑問文の形式に分け³、次いでそれぞれの文の機能に応じてさらに細かく分類する。なお、機能に基づく分類に関しては、前後の文脈を読み解きながら、共同研究者2名と調査協力者1名が判定し、これら3名の協議の上で最終決定を行った。

3. 2. 1 平叙文の分類

平叙文は、①「叙述」、②「主張」、③「心情」、④「引用」の4種に分類する。

①の「叙述」に属する文には以下のものがある。

- (1) 時間軸に沿って生起する出来事を表す文。
- (2) 特定の時間における一時的な状態を表す文。
- (3) 恒常的な状態を表す文。
- (4) ことがらに対する話者の判断を表す文のうち、書き手の主張とは感じられない文。

野田(1998)は「単に事実だけを客観的に述べる文(p.95)」を「事実文」としている。本稿での「叙述」の文はこの「事実文」に重なるものが多い。しかし、「事実だけ」を「客観的に」述べているかどうかについての判定は容易ではない。そこで、本稿では、事実かどうかに関わりなく、時間軸に沿って生起する出来事、一時的な状態、恒常的な状態を表す文を「叙述」と分類した。さらに、推量など書き手の判断が関わっている文のうち書き手の主張とは感じられない文も「叙述」に属するものとした。

「叙述」の例は以下の通りである。以下の例において、左の列の数字は当該社説の冒頭からの文の数、末尾の行の数字は記事のID番号、◆が付いている行は節の見出しである。該当する例には下線を引いてある。

(2)

12	◆アベノミクスは失敗か
13	<u>この数日は波乱含みとはいえ、株価はほぼ二倍になりました。</u>
14	<u>過去最高水準の企業収益だけでなく、失業率は下がり、税収も増えています。</u>
15	<u>借金が増える一方の国の財政ですが「二年続けて赤字国債を減額した」と、安倍晋三首相は始まったばかりの国会で胸を張りました。</u>
16	<u>その一方で、賃金の伸びは物価上昇に追いつかず、暮らしが上向く気配はありません。</u>
	160110

³ 「…てください」「風よ吹け」という命令形の文が1例ずつあった。数が少ないため、便宜上、依頼や願望という意味を考慮し、依頼の「…てください」は疑問文の「疑問」、願望の「風よ吹け」は平叙文の「心情」のグループに分類した。

(3)

12	今回のように、広範囲の連続地震になることは予想することができなかったのでしょうか。
13	現行の震度区分では最強の「震度7」が、専門家も見通せぬ本震の前触れだった。
14	自然の猛威は人知を超えることを、あらためて思い知らされる今回の試練です。
	160418

②の「主張」を表す文とは、ことがらに対する話者の判断を表す文のうち書き手の意見や価値評価を表していると考えられる文である。「主張」かどうかの判定は、これらの文の末尾に「...と主張します」ないしは「...と評価します」という文言を付け加えて文脈上成り立つかどうかによって決定した。

(4)

6	これまで企業をもうけさせてきたのは円安です。
7	問題は、好業績が賃金増につながらず、だから消費や投資への波及という好循環が生まれにくいことです。
8	いら立つ政府は「内部留保ばかりため込まず賃金を増やせ」と言うのですが、短兵急は現政権の悪い癖でしょう。
	160124

(5)

43	◆最終ゴールはもっと先
44	そして新たな課題を見つけ、次の目標に向けてまた駆け出せばいいのです。
45	マラソンも人生も、もちろん「きょう」が最終ゴールではない。
46	明日に向かって、楽しみながら走っていこうではありませんか。
	160313

なお、「主張」は、平叙文だけでなく、疑問文にも認められる。また、次に述べるように「心情」と分類された文の中にも「心情」を表すと同時に「主張」を行っていると言えるものがある。

③の「心情」を表す文とは、心理、感覚、希望、願望といった書き手の心情を述べる文のことである。野田(1998)の「心情文」と重なる部分が多いが、野田では「聞き手に伝達する意識がない」もの、すなわち、話し手の発話時における心情表出の文に限っているのに対し、本稿ではそのような限定を行わない。従って、「～てほしいのです」などの説明調の文や「胸騒ぎがしました」のような過去を表す文も「心情」に分類した。

(6)

4	経済不安の震源地、中国の上海で開かれた二十カ国・地域(G20)の財務相・中央銀行総裁会議。
5	目先のリスクを封じ込めようと躍起になる当局者たちの姿をみると、そんな印象を覚えます。
	160229

(7)

1	福島県の人口は十一万人減りました。
2	その原因を忘れられるというのなら、私たちはどうかしています。
3	風化の波をものともしない、新しい風よ吹け。
	160106

先に述べた「心情」を表すと同時に「主張」を行っていると感じられる文とは次のようなものである。

(8)

39	耐震、免震技術の前進ばかりではありません。
40	阪神大震災、東日本大震災で経験を積んだボランティアなど助け合う心も、被害を軽減させる減災の柱です。
41	だからこそ、時間とともに危険が広がっていく現場では、二次被害の阻止にあらゆる知恵を傾けたい。
	160418

この例の41行目は「傾けたい」という希望を表す表現で結ばれている。しかし、書き手は単に自分の希望を表明しているだけでなく、読み手に対する主張として「傾ける」ことの必要性を訴えている文であると解釈できる。この種の文の場合、「心情」を表すと同時に「主張」も表しているが、後に掲げる表2では「主張」の数には入れず、「心情」の文としてのみカウントした。

④の「引用」とは、第三者の発言や思考内容を引用しているもので、多くは以下のようにカギ括弧でくくられている。

(9)

31	冷戦終結後、民主主義の国として歩んできたポーランドの最新情勢をフランスの公共放送「F2」が伝えます。
32	「ポーランドの保守的な新政府はメディアや司法に介入して、より伝統的な国への回帰を目指しており、欧州委員会が懸念しています」
	160110

(10)

43	でもそれだけでいいのだろうか。
44	「誰が望んだ品種なの？」
45	素朴な疑問が高木さんの頭を離れません。
	160424

「引用」を表す文は上の例のように発話や思考の直接引用がほとんどである。従って、これらの文におけるデスマス体とダ体の使い分けは、元の発話や思考の主のスタイルを踏襲したものと見なすことができる。

3. 2. 2 疑問文の分類

本稿の疑問文とは、文末に「か」や「かしら」が付いていたり、疑問詞疑問文の形であったり、文末に上昇調が予想される文である。名称は「疑問文」だが、必ずしも「疑問」を表しているわけではなく、読み手の主張を行ったり問題提起を行ったりするものもある。そこで本稿では、疑問文を①「疑問」、②「主張」、③「問題提起」の3種に分類する。ただし、以下に述べるようにこの区分は明瞭なものではなく、相互に連続的である。

まず、①の「疑問」とは、読み手に対する問いかけや書き手の疑念を表すものである。次の(11)は読み手に対する問いかけ、(12)は書き手の疑念を表している。

(11)

57	その社会はきっと公平、平等に違いありません。
58	さあ、あなたならどんな未来を描きますか。
	160103

(12)

1	狭き門の正社員と増え続ける非正規社員。
2	この国はすでに二つの階層に分断されてしまったのではないか。
3	そんな不安さえよぎるのです。
	151206

問いかけを表す(11)とは違い、書き手の疑念を表す(12)は独話的な内言であり、読み手に対する問いかけはほとんど感じられない。

次に、②の「主張」とは、読み手に問いかける形で書き手の意見を主張する次のような文である。

(13)

48	国際紛争を武力で解決しないという憲法九条の規定は、非現実的との批判をしばしば浴びてきました。
49	だが、実は時代を経るほどに現実味を帯びてきているのではないのでしょうか。
	160101

(14)

35	ただ思い直せば、当時はまだ生活苦で、悠然とラジオを聞いた人が全国にどれだけいたか。
36	おそらくは「長い一年」をよくぞ生き延びて、ただ年を越せる感慨に浸った人が大半ではなかったか。
37	まだ貧しい現実と、見も知らぬ理想とが同居した年末、日本人が時代に一つの始末をつけた夜でした。
	151231

(15)

1	こいのぼりを眺めていると、子どもたちに風を送ってあげなければと思います。
---	--------------------------------------

2	だが待てよ。	
3	子どもは風の子。	
4	大人を泳がす追い風なのではないかしら。	
		160505

「主張」を表す疑問文の場合、デスマス体で書かれた(13)は読み手に問いかけつつ主張を行っているように感じられる。それに対して、ダ体で書かれたもの場合は、問いかけが感じられるものと感じられないものがある。例えば、(14)の下線部は、反語的に主張を行っているもので読み手への問いかけが感じられるが、(15)の下線部は書き手の独話的な内言を示す形での意見表明であり、読み手に対する問いかけはほとんど感じられない。

最後に、③の「問題提起」とは、読み手に問いかける形をとりながら、次の議論の課題を提起する次のような文である。

(16)

22	翻って、今はどうでしょう。	
23	安保法案にあらがった昨年の国会前デモ。	
24	自由の森学園高校（埼玉）から参加した有志たちは歌を熱唱しました。	
		160522

(17)

44	さて二〇一五年のきょう大みそか。	
45	節目の一年を振り返って私たちは次世代に何を残したか。	
46	政治家は安保法の成立で「平和の備え」を残せたと胸を張ります。	
47	その半面、安保法で次世代の人たちが戦争に巻き込まれる危険は高まります。	
		151231

これらの例は④の「疑問」との境界があいまいである。また、②の「主張」の例として提示した(14)の「ただ思い直せば、当時はまだ生活苦で、悠然とラジオを聞いた人が全国にどれだけいたか。」という文も、反語的に「ほとんどいなかっただろう」と主張しているようにも、次に続く主張「おそらくは「長い一年」をよくぞ生き延びて、ただ年を越せる感慨に浸った人が大半ではなかったか。」を導くための課題を提示しているようにも受け取れ、「主張」と「問題提起」との境界があいまいである。このように、疑問文における「疑問」「主張」「問題提起」の区分はその境界が明確でなく、相互に連続的なものであると考えられる。

3. 3 調査結果

以上の分類の集計結果を表2と表3に示す。

表2 平叙文の分類

	叙述	主張	心情	引用	合計
デスマス体	371 (79%)	260 (85%)	19 (59%)	15 (25%)	665 (77%)
ダ体	101 (21%)	45 (15%)	13 (41%)	44 (75%)	203 (23%)
合計	472 (100%)	305 (100%)	32 (100%)	59 (100%)	868 (100%)

表3 疑問文の分類

	疑問	主張	問題提起	合計
デスマス体	14 (47%)	7 (47%)	4 (22%)	25 (40%)
ダ体	16 (53%)	8 (53%)	14 (78%)	38 (60%)
合計	30 (100%)	15 (100%)	18 (100%)	63 (100%)

これらの表が示すように、ダ体の比率は、平叙文で23%とデスマス体より少ないのに対し、疑問文で60%とデスマス体より多い。

また、表2の「引用」は、すでに述べたように、元の発話や思考の主のスタイルを踏襲して文体の選択が行われているものがほとんどである。そのため、以下の考察においては、「引用」の59文を除いた872文（デスマス体675文、ダ体197文）を考察の対象とする。

4. 「従属度」と「読み手への働きかけ」

この節では、以上の分類結果を踏まえつつ、先行研究の指摘する「従属度」と「読み手（聞き手）への働きかけ」という問題について考える。

4. 1 従属度

野田は「従属節とおなじように、ほかの文に従属している文（p.99）」を「従属文」と名付けている。具体的には（18）の下線部のように、直後の「こんな」に従属してその内容を表している文や、（19）の下線部のように「～が」や「～けれど」に相当する文としてそれ以降の文に従属している文である。

（18）若くて、格好がよくて、少し厳しいけれども、いつも子供たちのことを考えていて、その上、たびたび口にする冗談もおもしろい。こんな先生が女子にもてないわけがありません。

（野田 1998、p.98 より）

（19）しかし具体的な狙いがどこにあるのかはまだわからない。そしてそれがどこであなたに結びついたのかもわからない。頭骨の意味もわからない。しかしヒントの数が増えれば、増えるぶんだけ我々は事態の確信に近づいていきます。

（野田 1998、p.97 より）

野田は従属度が高い場合はもっぱらダ体が用いられるが、低い場合にはデスマス体も用い得ると述べている。本稿では、平叙文について、直前か直後に照応先があり、その内容を表している（18）のような場合に「従属」のタグ付けを行った。その結果を表4に示す。

表4 平叙文における従属の有無

	叙述		主張		心情	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし
デスマス体	4	367	2	258	0	19
ダ体	45	56	11	34	4	9

ここに見られるように、従属ありの平叙文の数は「叙述」「主張」「心情」のどれにおいてもデスマス体よりダ体のほうが多い。このことから、野田が指摘するように、前後の文脈に対して従属度の高い文はダ体になりやすいことが分かる。その一方で、デスマス体であるにもかかわらず、従属ありとされる文が少数ながら認められている。さらに、ダ体で従属なしと認められた文が相

当数観察される。これらがどのような使われ方をしているのか、興味深いところである。本稿では5節において「主張」がダ体で行われている事例を取りあげ、「主張」における従属度と読み手への働きかけという点について検討する。

4. 2 読み手への働きかけ

Maynard (1992)は、書き手が読み手を別の主体として強く意識すればするほどデスマス体がいられるようになるのに対し、その意識が弱ければダ体がいられると述べている。野田 (1998)においても「聞き手に伝達する意識」の有無が取りあげられ、デスマス体が基調の文章で心情文がダ体になるのは聞き手への働きかけが弱いため、ダ体が基調の文章で伝達文や主張文がデスマス体になるのは聞き手への働きかけが強いためであると述べられている。

本調査でもすでに述べたように、疑問文ではデスマス体とダ体とで読み手への問いかけのあり方に違いがある。デスマス体であればどのような場合でも読み手に対する何らかの問いかけを表していると感じられるが、ダ体の疑問文は問いかけが感じられるもののほか、読み手を意識しない独話的な内言や、議論の標題のような印象を与えるものがある。その種の例は(15)と(17)で示したが、次の例の下線部もそれ以降の議論の課題を標題として示しているような印象があり、読み手への問いかけはほとんど感じられない。

(20)

13	沈没時は優先的に救出されたはずの「子ども」の乗客も百八人中、五十四人が犠牲になったが、上流階級の一等船客一人を除き、あとの五十三人は皆、貧しい労働者階級の三等船客だった。
14	なぜ三等船客に犠牲が集中したか。
15	沈没に至る船内外の記録を克明につづった名著『不沈』（ダニエル・アレン・バトラー、大地舜訳、実業之日本社）に、米臨床心理学者のこんな考察があります。
	160403

このようにデスマス体の疑問文は、読み手の存在を意識し、読み手に何らかの問いかけをするときに用いられるのに対し、ダ体の疑問文は総じてその意識が低いときに用いられる。先行研究が指摘するように聞き手への働きかけの強さは、デスマス体とダ体の選択に関与する場合があると言ってよいようである。

このことは、疑問文だけでなく平叙文の場合にも該当する。平叙文には直前までに述べられた事について解説的に説明を補っていると解釈されるものがある。この種の解説的な文の書き手は読み手に対して教示的な立場に立っていると言える。そのため読み手の存在が強く意識されることになり、その結果、デスマス体がいられやすくなるものと思われる。本調査で見いだされた解説的な文の場合、そのほとんどがデスマス体で行われ、ダ体が選択されることは極めて少なかった。以下に例を挙げる。

(21)

19	時間制限の緩和でマラソンの概念は変わり、楽しみながら走るという価値が加わりました。
20	大都市のコースの大部分は車道です。

21	そこから見るビルや商店街はいつもと違う非日常的な光景に映るからです。
	160313

この例の下線部で述べられた内容は、直前の 19 で述べられたことに対する理由を補足的に述べているものである。この例のように「叙述」の文では、直前で述べられたことについて何らかの補足的な解説を行っていると感じられるものが数多く観察されたが、そのうちの 1 例を除いてすべてがデスマス体であった。解説を加えるという教示的な立場に立つときは聞き手を意識することになり、その結果、デスマス体が選択されることになるのである。

さて、これまでに見てきた現象に限って言えば、読み手を強く意識する場合にデスマス体が選択されやすく、そうでない場合にダ体が選択されやすいとすることができる。しかしながら、本調査では、表 2 と表 3 が示す通り、読み手を強く意識しているはずの「主張」の文がダ体となっている例が相当数観察された。デスマス体が基調の論説文の中で、聞き手に強く働きかける「主張」の文がダ体で表現されているのはなぜなのだろうか。

すでに述べたように、野田はダ体が基調の文章でデスマス体になるものに「伝達文」と「主張文」を挙げ、これらの文がデスマス体になりやすいのは、「聞き手への働きかけが強いため(p.95)」であると述べている。野田の議論は、ダ体が基調の文章でデスマス体になるものは何かという観点から論じられているため、デスマス体が基調の文章で「主張文」がどのような現れ方をするのかということについて詳しい議論がなされているわけではない。しかし、野田が示した以下の表から、「ていねい調（デスマス体基調）」の文章では、「強いていねい調」はもちろんのこと、中立形（ダ体）が混じりやすい「弱いていねい調」の文章であったとしてもダ体の「主張文」は使われないと捉えられていることが読み取れる。

(31) ていねい調の 3 種類

	純粹ていねい調	強いていねい調	弱いていねい調
心情文	(使われない)	中立形	中立形
従属文	ていねい形	ていねい形	ていねい形
事実文			
主張文			
伝達文			

野田 (1998) p.93 より

読み手に伝達する意識がないままに行われる書き手の心情表出や独話調の文においてはデスマス体を基調とする文章でもダ体となるという点に関しては、野田の主張する通りである。しかし、その逆は真ではない。すなわち、デスマス体を基調とする文章で読み手に伝達する意識が強い場合にはダ体が用いられにくくなるというようなことは一概に言えないのではないと思われる。

4. 3 まとめ

以上、主として野田 (1998) の議論を参照しながら調査結果の報告と考察を行った。これにより、「従属度」という直前直後の文間の構造と機能にかかわる要因が文体の選択に関わっていることが確認された。また、デスマス体を基調とする文章において読み手の存在を意識しない心情表出や独話調の文がダ体となるということから「読み手への働きかけ」という文の機能的な要因が文体の選択にかかわっていると野田の主張についてもその妥当性が確認された。

しかし、デスマス体を基調とする文章において、読み手への働きかけが強い「主張」の文がダ体で表現されている場合が少なからず観察されたことから、「従属度」や「読み手への働きかけ」という文の構造的、機能的な要因だけでは解決がつかない問題があることも明らかになった。文体の選択は文の構造や機能との関わりだけでなく、文章の構成や書き手の心理的動機など、さまざまな要因が関わっていることが考えられる。そこで、以下においては、「主張」の文に的を絞り、質的な分析を行うことにより、文体シフトにかかわる文章の構成や書き手の心理的動機にかかわる要因について考えることにしたい。

5. 主張について

「主張」の文とは書き手の意見や価値評価を表していると考えられる文のことである。本稿ではすでに述べたように、当該の文に「…と主張する」あるいは「…と評価する」と付け加えて文脈上自然な文となるものを「主張」の文と判定した。その結果、表2と表3が示したように、デスマス体の平叙文260文と疑問文7文、およびダ体の平叙文45文と疑問文8文の合計320文が主張を表明していると判定された。また、「心情」に分類された平叙文の中でもデスマス体の4文とダ体の6文が主張を行っているとして判定された。以下の考察はこれらすべての文を対象として行うことにする。

5. 1 主張の連鎖の内部構造

「主張」の事例を観察していて気付くことは、書き手の主張が行われるときに、複数の主張の文が連続して生起することが多いということである。次の例では、網掛けをした複数の文の連鎖により書き手の主張が表明されている。

(22)

48	なぜ女性の管理職は増えにくいのか。
49	無論、自助努力も大事です。
50	けれども、そうした問題を生み出している根本原因は、明らかに社会の側にある。
51	障害者問題の構造も同じでしょう。
52	試されるのは、社会の包摂力だと思うのです。
	160103

この例のように主張の文が連続して現れる部分を「主張の連鎖」と呼ぶことにする。

上の例で注目したいのは、主張の連鎖を成している49～52の内部において50の文だけがダ体によって表現されているという点である。デスマス体を基調とする主張の連鎖において、ダ体へのシフトが行われたのはどのような理由によるのだろうか。

この節では主張の連鎖の内部にダ体が現れるこの種の事例を取りあげ、デスマス体を基調とする論説文の主張表明におけるダ体へのシフトの機能という問題について検討する。

まず、(22)の例の場合、書き手が主張したい最も重要な点は、52の「試されるのは、社会の包摂力だと思うのです」の部分だと言えるだろう。主張の連鎖における論の流れは、49で自助努力の大切さを認めた上で、50で女性の管理職が増えにくい根本原因が社会の側にあることが主張される。50の主張は49の主張とは異なるものであり、書き手が最も主張したい52を導くための根

拠として位置づけられるものである。すなわち 50 の主張は 52 の主張を導く重要な鍵となる情報なのである。したがって、52 の主張に説得力を増すためには、50 を読み手に目立つ形で提示するのが効果的である。デスマス体を基調とする主張の連鎖においてダ体という断定口調での主張を行ったのは、その部分を読者に強く印象づけ、それを踏まえてこの箇所でも最も重要な主張である「社会の包容力」を訴えるメッセージをより説得力のある形で提示する効果をねらったためではないかと考えられる。

この種の事例をもう少し観察することにしよう。

(23)

42	給費奨学生から翻訳家へ夢を追う花子の人生の門出。
43	平民の父は「華族の娘なんかに負けるな」と励まします。
44	階級と貧困の壁を教育で破ろうとした父の信念でした。
45	娘は終戦直後、文部省囑託として関わる教育改革にこの信念を注ぎ込みます。
46	「全ての子どもの将来の可能性が開けるように」と。
47	しかし私たちが今、教育を軽んじ、貧困の連鎖を看過するなら、歴史の歯車は、諦めの階級社会に向かって逆回転を始めるかもしれない。
48	あの父娘も夢みて槌（つち）打った機会均等の教育基盤をもう一度、固め直さねばなりません。
49	これから百年の後も、桜並木を歩く子どもたちの顔が皆、等しく晴れやかであるために。
	160403

この例では 47～49 までが主張の連鎖で、47 がダ体で表現されている。この連鎖では階級社会へと逆回転することを危惧する書き手の現状認識が 47 で表現され、続く 48 と 49 で、その現状認識を踏まえた主張が行われている。48 と 49 は、従属節の 49 が主節の 48 の後に続く倒置の関係にあり、これら 2 文で 1 つの主張が行われているものである。

この社説は 48 と 49 の主張の表明で締めくくられており、この主張がこの社説でも最も重要な主張であると言える。47 は、その主張を効果的に導くため、その根拠となる主張をダ体で表現することにより、読み手に強く印象づける働きを担っているのである。

(24)

35	◆改正より理念の実現
36	安倍晋三首相は夏の参院選で勝利し、自民党結党以来の党是である憲法の自主的改正に道を開きたいとの意欲を隠そうとしません。
37	国民から改正論が澎湃（ほうはい）と沸き上がる状況ならまだしも、世論調査で反対が半数を超す状況で改正に突き進むのなら強引です。
38	憲法擁護義務を課せられた立場なら、憲法理念が実現されていない状況の解消が先決ではないのか。
39	沖縄県民の民意や基本的人権が尊重され、米軍基地負担も劇的に軽減される。

40	沖縄で憲法の理念が実現すれば、国民が憲法で権力を律する立憲主義が、日本でも揺るぎないものになるはずです。
	160515

この例では 37～40 に主張の連鎖が観察され、40 でこの社説が完結している。連鎖内でダ体で使用されている 38 では、問題の解消が先決であるということが反語の疑問文によって強い口調で訴えられている。続く 39 では憲法理念の実現により沖縄の問題が軽減されるという予想が同じくダ体によって表現される⁴。それを受けて、沖縄の問題を日本全体の問題に敷衍して主張しているのが 40 の「沖縄で憲法の理念が実現すれば、国民が憲法で権力を律する立憲主義が、日本でも揺るぎないものになるはずです」という文である。この社説に関しても、最も重要な 40 の主張を導くための前提となる主張が 38 のダ体によって表現されている。

(25)

40	トップランナーではなくても、それぞれが「完走したい」「五時間を切りたい」など自分なりの目標を立てていることでしょう。
41	その目標に向けてスタートから飛ばすもよし、前半は体力を温存して終盤に勝負をかけるもよし。
42	「時」は止めたり戻したりすることはできないが、その時間をどのように使うかは自分次第です。
43	◆最終ゴールはもっと先
44	そして新たな課題を見つけ、次の目標に向けてまた駆け出せばいいのです。
45	マラソンも人生も、もちろん「きょう」が最終ゴールではない。
46	明日に向かって、楽しみながら走っていこうではありませんか。
	160313

この例では 41～46 に主張の連鎖が見られ、その中の 41 と 45 がダ体で示されている。41 の「…もよし、…もよし」は 42 の「その時間をどのように使うか」ということの具体的な例を列挙しているものと解釈できる。また、45 の「「きょう」が最終ゴールではない」は 46 の「明日に向かって、楽しみながら走っていこうではありませんか」という読者に対する呼びかけを導き出すためのものである。この社説も 46 によって完結しており、この文が社説を締めくくる最も重要な主張を表している。

以上、いくつかの事例を観察したが、そこから分かるように、主題の連鎖の中で最も重要とされる主張は、連鎖末尾の箇所ですマス体によって表現されるのが普通である。また、ダ体へのシフトが行われた文はそれに続くより重要な主張の根拠や前提を表すものであった。

本節で取りあげた主張の連鎖を形作る事例においては、より重要な主張を支えるための根拠やその主張を導くための前提となる情報がダ体へのシフトによって読み手に強く印象づける形で表現されていることが確認された。

⁴ 39 は「主張」と判定されず、「叙述」に分類された文である。

5. 2 主張の連鎖の「従属度」と「聞き手への働きかけ」

メイナード (1991) や Maynard (1992) では、デスマス体を基調とする随筆においてデスマス体が作者の意見を表す情報を表し、ダ体がそれを支える従属的な情報を表すのに用いられていることから、デスマス体は情報を前景化 (foregrounding) して伝えるのに対し、ダ体は情報を後景化 (backgrounding) して伝えるのに用いられると述べられている。以上に見た主張の連鎖の内部構造の事例もその妥当性を裏付けるものであり、より重要な主張を支えるための根拠や背景となる後景的な情報がダ体へとシフトされた文で表されていることが確認された。

一方において、Maynard (1992) は、前景化された発話と後景化された発話に関して次のように述べている。

Observations made so far all point to the distinction between two types of utterances: (1) foregrounded utterances directly addressing the listener with full awareness of the listener and (2) backgrounded utterances that provide subordinate information and that do not directly address the listener, but are rather almost self-addressed. (p.39)

すなわち、前景化された発話は聞き手を意識し、聞き手に対して直接発せられるものであるのに対して、後景化された発話は聞き手に直接発せられるものではなく独話に近いものであるという指摘である。

この点に関しては、これまでに見てきた主張の事例に照らして妥当であるとは考えられない。なぜなら上述の主張の連鎖の事例では、読み手にその内容を強く印象付け、それ以降に述べるより重要な主張を効果的に導く役割を果たすためにダ体へのシフトが行われていたからである。

主張の連鎖の構造には、確かに Maynard (1992) が述べるように、独話に近いと感じられるダ体の文も観察される。例えば次の例では 51～54 に主張の連鎖が見られるが、その冒頭の 51 は接続助詞「～し」を使った従属節と同じように 52 に従属するものであり、53 は 54 の「そんな」の内容を表す文として 54 に従属している。

(26)

49	夏には参院選挙があります。
50	憲法改正も大きなテーマになりそうです。
51	安倍政権の主導で景気回復するのは...などと板挟みに悩んだり引いたりせず、是々非々で議論を重ねデフレからしっかり脱却する。
52	そして格差の拡大、働く現場の分断に歯止めをかけ、若者の活躍の場を広げなければいけません。
53	そして昨年続き、戦後日本の平和主義のあり方が問われる憲法改正問題も堂々と議論し、あるべき姿へと一歩進める。
54	そんな一年にしたいものです。
	160110

この例でダ体が使われている 51 や 53 は、確かに聞き手に対する働きかけが感じられず、それらを従属節に降格させ直後の文と合わせて 1 文で表現したとしても文意が大きく損なわれることはない。しかし、次の例の主張の連鎖 40～46 においてダ体で示されている 40～42 の文は、44 の

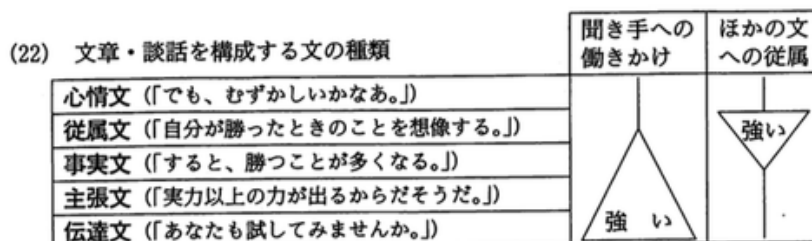
「それ」に従属する情報でありながら、それぞれの文が読み手に対して自説を強く訴える力を保っており、読み手に対する働きかけが失われているとは言い難い。

(27)

36	冷戦後、世界的ベストセラーになった本に米国政治学者サミュエル・ハンチントン氏の「文明の衝突」があります。
37	よく知られるように、冷戦時代の米ソ対立に代わって、冷戦後は西欧対非西欧(特にイスラム)の対立になると予見して論争を巻き起こし、のちに 9・11 を予想した書とまでいわれました。
38	その「文明の衝突」がアラビア語に翻訳され、イスラム過激派の発行物にしばしば引用されているそうです。
39	衝突はテロリストに好都合に違いありません。
40	衝突が世界史のうえの論考だとしても、それがテロリストたちに悪用されてはならない。
41	テロと憎悪と復讐(ふくしゅう)の負の連鎖にならぬよう世界は、私たちは、踏みとどまらねばならない。
42	そのためには衝突とはまさに逆方向の相互理解が欠かせない。
43	◆戦争とテロの犠牲者と
44	それはきれいな事にほかならないともいわれそうですが、米欧また日本の社会がどれほどイスラム世界を理解しているのかというのでしょうか。
45	二つの戦争による膨大な死者と、パリのテロの無辜の犠牲者とをならべて考えることもまた必要ではないでしょうか。
46	おおげさにいえば、世界史の中で今私たちは試されているのです。
	151116

ここにはダ体を用いて断定口調で断言することにより、自身の主張を読み手に強く印象づけたという書き手の心理が働いているように感じられる。この例の 40～42 は節の末尾に位置づけられており、その節を締めくくる文章である。「◆戦争とテロの犠牲者と」という次節の見出しを挟んで 44 の「それ」に従属してはいるものの、前節の締めくくりとして断定口調で強く読み手に訴えるためにダ体へのシフトが行われているのではないかと考えられる。

野田(1998)もメイナードと同様に、「ほかの文への従属」の強さが「聞き手への働きかけ」の強さと反比例的に相関していると捉えている。野田が掲げる以下の図は、聞き手への働きかけが弱いものは、他の文への従属が強く、反対に聞き手への働きかけが強いものは他の文への従属が弱いことを示すものである。



野田(1998) p.95 より

しかし、文の内部構造に関わる従属節の場合とは異なり、文章・談話における文の従属に関しては、「ほかの文への従属」の強さということと「聞き手への働きかけ」の弱さということとは必ずしも相関しない場合があるのである。

デスマス体を基調とする主張の連鎖にダ体を交えることは、そのこと自体でもその部分を卓立的に示す効果がある。さらに加えてダ体の断定的な口調による主張の表明は、その部分を読み手に強く印象づけ、読み手に訴えかける力を強めることになる。そのような強い主張の表明が、その後続くさらに重要な主張を導入するための根拠や前提として示される。根拠や前提を読み手に印象づけることは、書き手が最も主張したい内容をより説得的に主張するためのしっかりした土台を作ることである。本節ではその方法が利用されている事例をいくつか観察したが、これらの中には明らかに他の文の一部に従属しているにもかかわらず、聞き手への働きかけを強く感じさせるものがあった。また、他の文の特定の部分に従属していない文であっても、後続くより重要な主張の根拠や前提を表すという意味では後景的な情報を表すものであり、後の主張の文に従属している文であると言えるだろう。

このことは、文内部の従属という文レベルの問題とは異なり、文章や談話の構造や表現効果という観点から従属という問題を考えなければならないことを示している。すなわち、デスマス体を基調とする主張の連鎖の中でのダ体へのシフトは、少なくとも次の2つの機能を果たしていると考えられる。

- ① その主張が後続く主張に対して従属的に位置づけられる後景的な情報であることを明示し、主張の連鎖の内部構造を明確化する。
- ② 後続く主張を説得的に導入するため、主張の後景的な情報を読み手に強く印象づけるという書き手の心理的動機に基づく表現効果を発揮する。

5. 3 まとめ

本節ではデスマス体を基調とする論説文において、主張の連鎖の中にダ体の文が混じる現象を取りあげ、その要因を考察した。その結果、ダ体へのシフトが後景的な情報を明示的に示し、主張の連鎖の内部構造を明確化する働きを持つこと、および、断定的な口調で主張を行うことにより、それ以降に続くより重要な主張を説得的に導き出す働きがあることが分かった。このことにより、基調のデスマス体からダ体へのシフトには主張の連鎖内部の後景的な情報を明示するという構造的な要因のほかに、重要な主張をより効果的に提示するという書き手の心理的な動機という要因があることが明らかになった。

主張の連鎖の中には、今回取りあげたもののほかに、ダ体で希望や願望の表明がなされているものもあった。そもそも書き手の発話時における希望や願望の表出は、ダ体を用いた形式でなされ、聞き手の存在を意識しない独話的な発話となるものである。しかし、主張の連鎖の部分では、次の網掛け部のように、書き手の希望表明の形で書き手の意見の表明がなされているものがある。

(28)

34	安倍政権の「暴走」に歯止めをかけられるか否かは、野党の責任が大です。
35	あしたから 始まる代表質問では、安倍政治の問題点を徹底的に追及してほしい。

36	そして、夏の参院選や、同日選の可能性のある衆院選では、党利党略にこだわることなく、でき得る限りの選挙協力をして、安倍政治に異を唱えたい有権者の「受け皿」をつくってほしい。
37	野党がバラバラでは安倍政権が漁夫の利を得て「一強」を強めるだけです。
38	与党側は、野党間の選挙協力を「究極の談合だ」と批判しますが気にすることはありません。
39	憲法の規範や立憲主義を守り、政権の暴走を止めることは十分、選挙協力の大義になるからです。
	160105

書き手の心理的動機に基づく表現効果という問題を扱うにはこの種のデータについてもさらなる分析が必要だと思われる。また、本稿では主張の文が連続して現れる場合にのみ注目したが、主張の文は単独で現れることもある。そのような場合の文体の選択という問題も含め、今後も論説文における文体シフトの要因について検討を続けていきたいと考える。

参考文献

- 石黒圭 (2006) 「日本語学者の文章表現講座第五回：「です・ます形」と「だ・である形」の共存」『本が好き！』11月号, 光文社, 41-47.
- 熊谷滋子 (2001) 「新聞投書にみる文体の効果：「ですます体」と「非ですます体」の混用を通して」『人文論集』52(1), 273-286.
- 中村重穂 (2011) 「文体混用に関する一考察“「だ・である」体の「です・ます」体への混用について」『北海道大学留学生センター紀要』15, 20-39.
- 野田尚史(1998) 「「丁寧さ」から見た文章・談話の構造」『国語学』194, 98-102.
- メイナード・泉子・K (1991) 「文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について—」『言語』20(10), 75-80.
- Maynard, Senko K. (1992) Toward the Pedagogy of Style: Choosing between Abrupt and Formal Verb Forms in Japanese 『世界の日本語教育』2, 27-43.